

令和4年度障害者ピアサポート研修事業に係る指導者養成研修事業
事業報告書

令和5年3月

PwC コンサルティング合同会社

概要

【事業目的】

本事業は「障害者ピアサポート研修」の実施主体となる都道府県及び指定都市が、国の実施要綱に基づき適切に教育効果の高い研修を実施するための指導者養成を行うことを目的として実施した。

【研修概要】

検討委員会を通じて、本事業で行う指導者養成研修（以下、「本研修」という）のプログラム内容を検討し、3日間の研修を実施した。1日目はオンライン配信とし、参加者に基本的な知識を身に付けてもらい、2日目、3日目は東京都内で対面形式にて実施した。

本研修のプログラム内容は別冊にて詳細を掲載している。

【研修結果】

実施後に行った受講者アンケートでは、いずれのプログラムにおいてもほぼすべての人から役立ったとの回答を得ることができた。特に、2日目、3日目は対面でグループワークも実施したこともあり、「とても役に立った」との回答が多かった。

実施後の結果を踏まえ、実施後に検討委員会で検討の上、次年度につなげるための考察を行った。

【考察】

本研修が横展開できるように、プログラムは基本公開することとした。また、受講者アンケートや検討委員会から以下の点について、今後より良い研修を行うためのポイントとして整理した。

- ア. 合理的配慮の視点
- イ. 障害当事者の参加
- ウ. 時間配分
- エ. オンラインでの実施
- オ. フォローアップ研修に関する解説の充実

目次

1. 事業概要	4
(1) 事業の実施背景及び目的	4
(2) 事業検討委員会	5
2. 指導者養成研修実施概要.....	8
(1) 実施状況.....	8
(2) 受講者の状況	17
(3) 受講後アンケート	18
3. 次年度に向けて	25
(1) 本研修の今後の改善ポイント.....	25
(2) 検討委員からの所見	26
付録.....	34
付録 指導者養成研修アンケート	35

1. 事業概要

本章では、本事業の背景と目的、目的を達成するための方法について記載する。

(1) 事業の実施背景及び目的

①背景

令和3年度障害福祉サービス等報酬改定において、自立生活援助、計画相談支援、障害児相談支援、地域移行支援、地域定着支援を対象としたピアサポート体制加算、同時期に創設された利用者の就労や生産活動等への参加等をもって一律に評価する報酬体系を採用している就労継続支援B型を対象としたピアサポート実施加算が創設された。

当該加算については、障害者総合福祉推進事業の地域生活支援事業に規定される「障害者ピアサポート研修」の基礎研修、専門研修を修了した障害者及び管理者等を常勤換算方式でそれぞれ0.5人以上配置することが要件となっているが、実施主体は都道府県又は指定都市とされており、全国の自治体は当該研修の実施に向けて検討委員会等を立ち上げるなど準備を始めているところである。一方で、当該研修は厚生労働科学研究（早稲田大学 岩崎香教授）の研究成果を踏まえて事業化されたものであり、参考となる研修テキストは公表されているものの、研修カリキュラムに従って教育効果の高い研修実施体制を構築するには課題の多い自治体が多いというのが現状である。なお、当該厚生労働科学研究の研究代表者であった早稲田大学の岩崎香教授が、このような自治体のサポートをするための任意団体として「障害者ピアサポート研修普及協会」を設立しており、令和3年度には約20自治体に対して技術的助言等を行っている実績がある。

②目的

以上の背景のもと、本事業は「障害者ピアサポート研修」の実施主体となる都道府県及び指定都市が、国の実施要綱に基づき適切に教育効果の高い研修を実施するための指導者養成を行うことを目的として実施した。

(2) 事業検討委員会

障害当事者やピアサポート活動に知見のある有識者による検討委員会を組成して議論を進めた。検討会は全3回実施した

①検討委員

検討委員会委員は次のとおりである。なお、委員の構成は障害当事者6名、その他有識者等6名で構成し、座長には秋山氏、岩崎氏の2名が就任した。

図表1 検討委員会委員

氏名	所属
◎秋山 浩子	特定非営利活動法人自立生活センター日野
市川 剛	未来の会
岩上 洋一	社会福祉法人じりつ
◎岩崎 香	早稲田大学人間科学学術院
彼谷 哲志	特定非営利活動法人あすなろ
小阪 和誠	一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構
四ノ宮 美恵子	東京リハビリテーションセンター世田谷
中田 健士	株式会社 MARS
奈良崎 真弓	個人
又村 あおい	一般社団法人全国手をつなぐ育成会連合会
宮本 有紀	東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神看護学分野
森 幸子	一般社団法人日本難病・疾病団体協議会

(五十音順、敬称略、◎は座長)

検討委員会オブザーバーとして次の者が参画した。

図表2 検討委員会オブザーバー

氏名	所属
金川 洋輔	厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課

(敬称略)

本事業を実施した事務局は下記の通りである。この他、経理等担当スタッフを配置した。

図表3 事務局

氏名	所属
東海林 崇	PwC コンサルティング合同会社 ディレクター
吉野 智	PwC コンサルティング合同会社 マネージャー
橋本 那音	PwC コンサルティング合同会社 アソシエイト

イ. 検討委員会開催状況

全4回の検討委員会は、新型コロナウイルス感染拡大状況を踏まえ、会議は原則オンライン開催とした。なお、検討委員会の検討については、令和4年度障害者ピアサポート研修事業に係

る指導者養成研修プログラム(案)や令和3年度障害者総合福祉推進事業「障害者ピアサポート研修における講師の養成のための研修カリキュラムの効果測定及びガイドブックの開発」、平成30年度厚生労働科学研究「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」等の成果を踏まえて検討を進めた。

図表4 委員会議題

開催日	主な議題案
第1回 令和4年7月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度障害者総合福祉推進事業の報告 ・指導者養成研修プログラム案 ・指導者養成研修日程
第2回 令和4年8月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者養成研修プログラム案 ・研修資料の構成 ・研修協力者(ファシリテーター) ・指導者養成研修の開催日程
第3回 令和4年9月29日	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者養成研修の講師案 ・指導者養成研修資料の構成 ・指導者養成研修協力者(ファシリテーター)の構成
第4回 令和4年12月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者養成研修の実施状況 ・指導者養成研修のアンケート結果 ・指導者養成研修資料及び動画の自治体送付について ・報告書骨子案

②研修協力者(ファシリテーター)

研修会当日に演習グループのファシリテーターとして、検討委員の他、以下の障害者ピアサポート研修普及協会のメンバーに参画していただいた。

図表5 研修協力者(ファシリテーター)

氏名	所属
飯山 和弘	社会福祉法人じりつ
五十嵐 信亮	一般財団法人竹田健康財団 竹田総合病院
井谷 重人	特定非営利活動法人自立生活センター星空
内布 智之	一般社団法人日本メンタルヘルスパイアサポート専門員研修機構
太田 令子	千葉県千葉リハビリテーションセンター
門屋 充郎	特定非営利活動法人十勝障がい者支援センター
栄 セツコ	桃山学院大学
島津 渡	株式会社真和
平良 幸司	社会福祉法人横浜市社会事業協会
堤 愛子	特定非営利活動法人町田ヒューマンネットワーク
蛭川 涼子	特定非営利活動法人自立生活センターSTEP えどがわ
三宅 美智	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所
矢部 滋也	一般社団法人北海道ピアサポート協会

(五十音順 敬称略)

③事業経過

本事業は令和4年5月25日に事業の内示を受け、令和4年3月31日まで、次の経過で事業を実施した。

図表6 事業経過

事業実施状況	
令和3年 6月	研修内容の検討
7月	★第1回委員会
8月	★第2回委員会 研修内容の検討 講師、会場日程調整
9月	★第3回委員会
10月	内容確定 資料印刷、準備 ★オンラインにて1日目開催 10月27日(木) 9:45~16:00
11月	★対面にて2日目、3日目開催 11月8日(火) 10:30~16:55 9日(水) 9:20~15:45
12月	実施結果のとりまとめ ★第4回委員会
令和4年 1月	↑ 報告書作成
2月	↓ 動画CDR作成、配布
3月	↓

2. 指導者養成研修実施概要

本章では指導者養成研修の実施結果を記載する。

(1) 実施状況

検討委員会での検討を経て、令和4年10月27日（木）9：45～16：00にオンラインにて研修を実施し、令和4年11月8日（火）10：30～16：55、9日（水）9：20～15：45に、東京都千代田区（ベルサール九段）にて実施した。

① 1日目（令和4年10月27日） 研修概要

1日目の研修はオンラインで実施した。なお、研修動画は録画し、2日目、3日目参加予定者で参加できなかった人に事前視聴してもらうようにした。なお、研修の詳細については、資料1を参照のこと。

図表7 1日目研修概要

プログラム		実施時間	担当講師
オリエンテーション 主催者挨拶・研修趣旨説明		15	事務局
【基礎研修】	ピアサポートの理解	15	秋山 浩子
	ピアサポートの実際・事例	15	森 幸子
	コミュニケーションの基本	15	宮本 有紀
	障害福祉サービスの基礎と実際	15	岩上 洋一
	ピアサポートの専門性	15	小阪 和誠
【専門研修】	基礎研修の振り返り	15	岩崎 香
	ピアサポーターの基礎と専門性	15	五十嵐 信亮
	ピアサポートの専門性の活用	15	彼谷 哲志
	関連する保健医療福祉施策の仕組みと実際（障害当事者対象）	15	岩上 洋一
	ピアサポートを活用する技術と仕組み（事業所対象）	15	中田 健士
	ピアサポーターとしての働き方（障害当事者対象）	15	矢部 滋也
	ピアサポーターを活かす雇用（事業所対象）	15	中田 健士
	セルフマネジメントとバウンダリー	15	飯山 和弘
	チームアプローチ	15	四ノ宮 美恵子
【フォローアップ研修】 位置づけとカリキュラム概要	30	平良 幸司	
研修まとめ	15	岩崎 香/事務局	

②2日目、3日目（令和4年11月8日、9日） 研修概要

2日目、3日目の研修は東京都千代田区で対面にて実施した。なお、研修の詳細については、資料2を参照のこと。

図表8 2日目、3日目研修概要

	プログラム	実施時間	担当講師
2 日 目	オリエンテーション 主催者挨拶・研修趣旨説明	15	事務局
	行政説明	20	厚生労働省
	ピアサポーターと専門職との協業の効果について	30	岩崎 香
	ピアサポートの理解（基礎研修）	30	秋山 浩子
	ピアサポートの実際・事例（基礎研修）	70	奈良崎 真弓 森 幸子、市川 剛 井谷 重人、飯山 和弘 (門屋 充郎、岩上 洋一)
	演習①	60	彼谷 哲志
	障害者ピアサポート研修について（実施要綱）	30	厚生労働省
	自治体の実施事例報告	30	東京都、宮崎県 (堤 愛子)
	事務連絡	10	事務局
3 日 目	オリエンテーション 研修趣旨説明	10	事務局
	ピアサポートに関する研修ならではのファシリテートのポイント 演習②	60	宮本 有紀、矢部 滋也
	研修開催準備と運営 障害ごとの合理的配慮について	60	岩崎 香、岩上 洋一 蛭川 涼子 奈良崎 真弓、又村 あおい
	演習③	120	岩上 洋一
	研修まとめ	10	岩崎 香、秋山 浩子
	事務連絡	15	事務局

③研修カリキュラムの詳細

本シラバス案は、厚生労働省が示している障害者ピアサポート研修事業要綱に添って、令和3年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「障害者ピアサポート研修における講師の養成のための研修カリキュラムの効果測定及びガイドブックの開発」（社会福祉法人豊芯会）にて作成したものを活用した。

図表 9 基礎研修シラバス

番号及び科目名称	獲得目標	内容	時間数
<p>オリエンテーション →要綱には提示されて おりません。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害者ピアサポート研修の流れと目的を理解する。 ・ 講義と演習を繰り返すため、グループワークに参加する際のルールについて理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2日間の研修の目的、概略を説明する。特に本研修が障害福祉サービス等で職員として働くピアサポーターの養成及び、ともに働く事業所職員のピアサポートへの理解を促進することを目的としている点についての理解を深める。 ・ グループワークへの参加に関するグラドルールなどを提示し、積極的な参加を促す。 〈グラドルール例〉 ○グループに積極的に参加しましょう。 ○しっかり聴く姿勢を心がけましょう。 もちろん、内容によっては「パス」という選択もあります。 ○一人ひとりの考えを尊重しましょう。 どのような意見や発言も批判や否定をしないで傾聴しましょう。 ○時間をひとりじめするのではなく、わかちあいましょ う。 ○お互いの信頼がなければ話はできません。参加者個人の情報は、その場において帰り、他人に話したりしないようにしましょう。 	<p>—</p>
<p>1. ピアサポートの理解 2. 演習①</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ピアサポートとは何かという基本について理解する。 ・ ピアサポート活動は、障害者の人権と深く関連しており、障害当事者の強みを活かし、その人らしい人生を生きるという当たり前の権利を実現しようとする点を大きな特徴があることを学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ピアサポートとは仲間（ピア）としての支えあいであることを理解する。ピアサポート＝経験を活かして働くということではなく、多様な領域で多彩な活動が展開されており、障害福祉サービス等で働くこともその一部であるということ認識する。 ・ ピアサポートは他領域でも活用されているが、障害領域でも、精神障害、身体障害、知的障害、難病、高次脳機能障害など、それぞれの障害ごとに多彩なピアサポート活動が展開されてきた歴史があることを学ぶ。 ・ ピアサポート活動では、ストレングス視点（強みを活かす視点）が重要であり、その人のやりたいことの実現に向けてともに歩む姿勢が重要であることを理解する。 ・ ピアサポート活動と障害者の権利に関する条約は関連しており、条約は人の多様性を認め、当事者の意思を尊重することの大切さをうたっている。ピアサポート活動もまた、障害者の人権尊重ということを大事にしている実践であることを学ぶ。 ・ 演習においては、グループメンバーの自己紹介を兼ねて、自分が経験から考えるピアサポートや、自分自身の強みについて話し合い、これからはじまる研修のウォーミングアップを行うとともに、相互理解を深める。 	<p>講義 30分 演習 60分</p>

番号及び科目名称	獲得目標	内容	時間数
3. ピアサポートの 実際・実例 4. 演習②	<ul style="list-style-type: none"> 「ピアサポートの理解」にいても、障害ごとのピアサポートについて触れたが、ここでは、障害当事者の経験に基づく語りを通して、より具体的にピアサポートを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な障害領域のピアサポーターがそれぞれの障害領域におけるピアサポートの歴史を踏えつつ、その活動の実際をわかりやすく語ってもらうことにより、ピアサポートへの理解を深める 【例】精神障害、身体障害、知的障害、高次脳機能障害、難病など。 さまざまな障害領域でのピアサポートが活用される場所や方法は異なるが、共通しているのは、経験を生かして活動する点にあることを理解する。 演習においては、体験に基づく講義を踏まえ、障害当事者の方は自分の経験の活かし方を考え、事業所職員はピアサポートをどうしたら活かすことができるのかを考える。 	講義 70分 演習 40分
5. コミュニケーションの基本 6. 演習③	<ul style="list-style-type: none"> 人を対象としたサポートでのコミュニケーションの大切さを学ぶ。 技法を使用することでの気づきを共有し、自らのコミュニケーションへの意識を働かせる。 	人をサポートするコミュニケーションにおいて、特に以下の点に留意し、自分自身のコミュニケーションを振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ○人をサポートするコミュニケーションでは、相手に対する理解を深める態度が大切(受容と共感)。 ○自分自身の体験を思い起こし、話している相手の気持ちを考える。 ○話を聴く時は、プライバシー、距離感、視線、心地よさなどに配慮する。 ○自分の考えを押し付けるのではなく、「私」を主語にする伝え方をこころがける。 ・演習では、例えば、ロールプレイなどを取り入れ、YOU(ユ)メッセージをI(アイ)メッセージに変えて見るなどによって、どのように印象が変わるか体験してみる。その印象からの気づきを共有する。 	講義 40分 演習 60分
7. 障害福祉サービスの基礎と実際 8. 演習④	<ul style="list-style-type: none"> 障害福祉施策の歴史や障害福祉施策の仕組みを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターが実際に雇用される障害福祉サービス等の歴史や現状、その枠組みなどを把握する。 ・演習では、どのような福祉サービス等があるのかを挙げ、実際に事業所などで「雇用された」ピアサポーターがどのように経験を活かして活動できるのか(活動しているか)を検討する。事業所職員の立場からは、どのようにピアサポーターに活躍してもらいたいかを考える。 	講義 40分 演習 20分
9. ピアサポートの 専門性 10. 演習⑤	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポートの専門性と、それを活かすことにより、より良いサービスが提供できることを理解する。 ・その専門性を担保するための倫理と守秘義務について学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターの大切な強みは、障害や病気をもちながら生きてきた経験を活かして共感し、同じような経験をしている人が前向きに生きていけるように応援できる点にあることを認識する。 ・障害福祉サービス等における職員として働く際に、守る必要があるルールについて理解する。 ・演習においては、ピアサポートの専門性についてディスカッションを通して、ピアサポーターと他の職員が一緒に働く(協働する)ことでより良いサービスが提供できることを理解する。 	講義 30分 演習 50分

図表 10 専門シラバス

科目	獲得目標	内容	時間数
1. 基礎研修の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 基礎研修で学んだことを振り返るとともに、専門研修の概要を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポートの多様性、当事者の意思を尊重するという基本的な姿勢、経験を活かし、その人の大切な強みを引き出すピアサポートの専門性など、基礎研修での学びを振り返る。 専門研修での学びの大枠を理解する。 	講義 30分
2. ピアサポーターの基礎と専門性 3. 演習①	<ul style="list-style-type: none"> “リカバリー”（「障害や病気のある者がありのままの自分らしく生きようとする」ということ）について理解する。 障害者ピアサポーターとしての専門性について改めて確認する。 障害や病気のある者がありのままの自分らしく生きようとする過程やこれまでの経験等を言葉にすること（リカバリーストーリーを語ること）の大切さを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 障害や病気によって、人生において困難な体験をしたとしても、そこから“リカバリー”（障害や病気のある者がありのままの自分らしく生きようとする）していけるということを体現しているのが、ピアサポーターであり、ロールモデルとして、サポートを必要としている人たちが希望を見いだすことを後押しする役割を担っていることを理解する。 講義においては、障害当事者の講師が自らのリカバリーストーリーを語ることにより、理解が深まる。 演習では、ピアサポーターだけではなく、事業所の職員もリカバリーストーリーを書く。障害当事者とは立場が異なる部分もあるが、これまでの人生における困難と向き合い、どのように自分らしく生きてきたのかを書く。自分の描いたリカバリーストーリーをグループメンバーに語りながら「他人がリカバリーするのを手助けする」ために「他者に自分を差し出す感覚」を主体的に学ぶ。 	講義 40分 演習 60分
4. ピアサポートの専門性の活用 5. 演習②	<ul style="list-style-type: none"> ピアの専門性を活かすために重要な視点を理解する。 ピアの専門性の活かし方を具体的な例から学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアの専門性を活かした支援を実践するために以下のような重要な視点について理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ○障害を理解する… ICF（国際生活機能分類） ○その人の強みを活かす（ストレングス）の視点 ○その人の持っている力を高める（エンパワメント） ○その人の権利を守る…アドボカシーとピアアドボカシー ○どこで誰とどんな風に暮らすかを決める手助けをする…意思決定支援 ・具体例を通して、ピアサポートの専門性を活かす方法を学ぶ。 ・演習においては、事例を通して、ピアサポートの専門性が具体的な場面でどう活用できるのかを理解する。特にRさん、Mさん、及びJさんを取り巻く環境のストレングスを見つけ出し、ピアサポーターとして、あるいは、事業所の職員として伝えたい経験やどのような支援が考えられるかを話し合う。 	講義 40分 演習 30分
6. 関連する保健医療福祉施策の仕組みと業務の実際（障害者） 7. 演習③	<ul style="list-style-type: none"> 保健・医療・福祉に関係する制度や法律の関連を知る。 生活を支える事業や機関を知る。 障害福祉サービス事業所等での実際の業務をイメージできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 保健制度・医療制度・福祉制度に関する基本的な法律について理解する。また、その中で、特に障害者福祉に関連する法律について学ぶ。 人としての生活を支えている社会保障制度、保健・医療の仕組み等についても理解する。 障害福祉サービス等に直接かかわる障害者総合支援法の中のサービスや、医療機関においてどのようにピアサポートが活用されているのかを具体例を通して学ぶ。 演習では、自分自身が勤務しているところ、勤務したことがあるところについて説明してみたり、働いてみたいところについて話し合う。働いた経験や利用した経験がないサービスについても、グループメンバーの話をお聴きすることが学びとなる。 	講義 40分 演習 20分

科目	獲得目標	内容	時間数
6. ピアサポートを活用する技術と仕組み（事業所） 7. 演習③	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターがいることで、その事業所の職員だけでなく、組織にも良い影響が生まれることを理解する。 ピアサポーターが効果的にそのスキル（能力や実力）を発揮するためには、事業所がピアサポートを理解し、環境を整えることの必要性について理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターがいることで、利用者に対してだけでなく、組織に対しても良い変化が生まれることが期待されるが、そうした効果を生むためには、「病気・障害への理解」「人として尊重すること」「ピアサポーターの専門性への理解」が必要であることを理解する。 ピアサポーターが働く環境や労働条件として、「ピアサポーターが相談できる相手が職場内にいること」、「適正な賃金」、「職場内での人間関係」が重視されていることから、ピアサポーターと一緒に働く職員との協働が必要不可欠であることを理解する。 演習では、ピアサポーターと一緒に働くことになった場合に期待することと、ピアサポーターと共に働きやすい職場環境を作るためにはどんなことができるのか、グループでアイデアを出し合うことにより、ピアサポートの活用と事業所の仕組みづくりを学ぶ。 	講義 40分 演習 20分
9. ピアサポーターとしての働き方（障害者） 10. 演習⑤	<ul style="list-style-type: none"> 労働者として働く上での権利と労働法規について学ぶ。 人を支援する上で、理解しておく必要がある倫理や各領域の倫理基準等について学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 雇用主（使用者）と雇用契約を結ぶことによって、労働者は労務を提供する義務などを負い、雇用主は約束した賃金を支払うなどの義務を負うことになることなど、労働契約の基本、具体的な手続き等について学ぶ。 雇用される事業所にも、就業規則などの職場の規程やルールがあり、それを遵守することが求められることを理解する。 事業所が労働法規を守っていないような場合や、待遇や働きやすさに満足できない場合、職場を変えることも選択肢のひとつであることを学ぶ。 対人援助を仕事とする際に、守るべき倫理について学び、関連する団体の倫理綱領や行動規範などを参照することにより、倫理に対する理解を深める。 演習では、これまでの職場で経験したことに関して、グループで話し合うことを通して、事業所で職員として働く上での権利や倫理観について確認する。 	講義 30分 演習 40分
9. ピアサポーターを活かす雇用（事業所） 10. 演習⑤	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターの雇用についての現状を知る。 ピアサポーターが活躍しやすい条件を具体的に考え、ピアサポーターと専門職が協働することについて理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポート活動状況調査などの結果や実践例から、ピアサポーターがどのような場所で雇用され、活動しているのかを理解する。 実践例などから、ピアサポーターの業務内容や雇用の実情を学び、ピアサポーターの活かし方を考える。 演習においては、自分が所属する事業所でピアサポーターの活躍が考えられる具体的な支援内容について検討する。また、事業所でピアサポーターと働くことに不安を感じている職員がいる場合の対応などを一緒に考える。 	講義 30分 演習 40分
11. セルフマネジメントとバウンダリー 12. 演習⑥	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターとして働き続けるために、セルフマネジメント（自己管理）の大切を知る。 役割葛藤、二重関係などピアサポーターが葛藤しやすい状況を理解する。 バウンダリーを意識することで、自分と相手を大切にする関 	<ul style="list-style-type: none"> ピアサポーターが抱えやすい葛藤について、具体例を示しながら、理解を進める。 ○当事者でもあり、支援者でもあるという役割葛藤 ○支援者と利用者が職員とサービス利用者というだけでなく、友人関係にあるといったように、ピアサポーターは複数の関係性（二重関係）に陥ることがある。 上記のような環境に置かれることにより、「私」と「他者」という人間関係や感情の境界（バウンダリー）が曖昧になり、葛藤が生じたり、燃え尽きてしまうこともあることを理解する。 セルフケアを意識することは、自分自身と向き合う 	講義 30分 演習 40分

科目	獲得目標	内容	時間数
	係性を学ぶ。	<p>ことでもあり、その大切さと意味を再認識する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習においては、ストレスなどを抱えた時の自己対処方法や、相談できる場所や人についてグループで話し合い、働き続けるためのセルフケアの大切さについて理解する。また、支援している中で、人との関係で悩んだり、苦勞したことを出し合い、バウンダリーについての意識を高める。 	
<p>13. チームアプローチ</p> <p>14. 演習⑦</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・チームワークの必要性について学ぶ。 ・チームの中でのピアサポーターの役割や業務をイメージし、ピアサポーターの強みが発揮できること・発揮できるチーム作りについて学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームとは何か、チームの必要性について学ぶ。また、チームの一員としてピアサポーターが働くために留意すること（合理的な配慮を含む）や役割、その有用性について学ぶ。 具体的には、以下の点が重要である。 <ul style="list-style-type: none"> ○利用者の言葉に寄り添い、話に耳を傾けること ○日々のコミュニケーションを通じて信頼関係をつくること ○対等性を守り、互いを尊重して認め合うこと ○ピアサポーターがもつ経験から得た知恵を活用すること ・演習については、実際にどのようなチームで働いているのかを出し合う。それぞれのチームにおいて、担っているピアサポーターの役割は何か、ピアサポーターが強みを発揮できているとするならば、その要因は何か、うまく機能できていないとするならば、その要因は何かといった具体的な内容について、検討する。 	<p>講義 40分</p> <p>演習 60分</p>

図表 11 フォローアップ研修 シラバス

科目	獲得目標	内容	時間数
1. 専門研修の振り返り	・専門研修の振り返り	・基礎研修、専門研修を終えた人を対象として、これまでの学びを振り返るとともに、フォローアップ研修の概要を知る。	講義 30分
2. 障害特性	・障害領域ごとの障害特性について学ぶ。	・ピアサポートは多様な領域で活用されているが、本研修で養成しているピアサポーターは、障害福祉サービス等における活躍が期待されている。障害福祉サービス等の対象となっている障害や病気についての理解を深める。	講義 60分
3. 働くことの意義 4. 演習①	・ピアサポーターとして働き続けることが、職場にもたらす効果について理解する。	・働くことにおける理想と現実のミスマッチは誰にでも起こり得ることで、現実の中で「働くということ」の意義について考える。ピアサポーターとしての体験を交えた講義が行われることで、より具体的に働くことの意義について認識が深まる。そのうえで、ピアサポーターが職場に居続ける意味についても改めて考える。 ・演習では、「なぜ働くのか」「自分がはたらくことの意義」「働き続けるためにやっていること」などをグループで話し合う。様々な葛藤がある中で、今一度立ち止まり自分自身の、そしてピアサポーター（事業所職員）として「働くことの意義」を見つめ返し、再確認することを目的とする。ピアサポーターとして働く上で協働する職員などが、同じテーマについてどう考えているのかを知り、相互理解を深める。	講義 30分 演習 60分
5. 障害者雇用 6. 演習②	・障害者雇用の実際と留意点について学ぶ。	・障害者雇用促進法を中心に、障害者雇用の制度について学ぶ。 ・障害者雇用は、社会的な貢献や経営上のメリットにより、これまでも社会福祉の現場で行われてきた。しかし、単なる障害者雇用の枠組みではなく、その事業所がピアサポートを評価し、利用者支援の考え方の中に、ストレングスやリカバリーの視点があるのかどうかということ重要であることを理解する。 ・逆に、雇用する側に立つと、雇用するピアサポーターに何を望むのかということを考えてみることで、ピアサポーター（だけでなくその他の職員にも）として何を求められ、何ができるのかということについて考えを深める。 ・演習では、障害者雇用で、雇用する側、される側双方にとって、より良い職場環境づくりや、働き続けられる工夫についてディスカッションにより深める。	講義 40分 演習 60分
7. ピアサポーターとしての継続的な就労	・ピアサポーターとしての能力を発揮し、働き続けるために必要なポイントについて学ぶ。	・障害や病気により、また、その人のこれまでの生き方や家族、住まいなどによっても、ピアサポーターの置かれている環境はさまざまである。その人により、ピアサポーターを目指した理由も、現状も異なるが、実際に、ピアサポーターとして働く中での自分に関する気づき、自分を取りまく環境（職場を含む）への気づきを得て、働き続けることができている障害当事者の体験から学ぶ。	講義 60分
8. ピアサポーターとしての効果的なコミュニケーション技法 9. 演習③	ピアサポーターとして、さまざまな人と関わる上で、その場所や相手、目的にふさわしいコミュニケーション技法について事例検討等を通じて体感する。	・職種による立場や違いを念頭においたコミュニケーションや、他者が経験していない事柄を伝えるうえで意識しておきたいことなどを学ぶ。 ・職種にかかわらず発言しやすい場づくりについて学び、連携の中で発信力を高めることによる専門性の発揮方法を学ぶ。 ・演習では、具体的な事例を通して、多職種チームのなかで自分の意見をどう効果的に伝えることができ	講義 60分 演習 70分

科目	獲得目標	内容	時間数
		<p>るかを体験する。この演習は、事例に対する正しい支援方法を導き出すことを目的としているのではなく、経験に基づくピアサポートの視点、他の職員の専門的な視点などが交わることにより、多角的な視点でその人を知り、一緒に可能性を探ることが目的である。</p>	
<p>10. ピアサポーターとして現場で効果的に力を発揮するための準備 11. 演習⑤</p>	<p>・今、なぜピアサポーターなのかということに立ち戻り、ピアサポーターとして、力を発揮する上で、必要な事柄について認識を深める。</p>	<p>・今なぜ、障害福祉サービス等におけるピアサポーターの配置が必要なのか、その本質について改めて考える。 ・事業所内外の職員や関係機関の人たちとの協働や連携なしに、ピアサポーターが効果的に力を発揮できないことを認識する。相互の信頼、パートナーシップに基づいた関係性がうまく機能してこと、ピアサポーターが持てる力を発揮することができる点を理解する。 演習では、自分が人を支援する仕事につこうと考えた原点に立ち戻り、改めて今、自分の力を活かして、どういうことを福祉サービスの範疇で実施してみたいかをディスカッションする。</p>	<p>講義 30分 演習 40分</p>

(2) 受講者の状況

① 募集方法・実施方法

本研修は、厚生労働省を通じて都道府県及び指定都市に参加者を募集した。なお、参加する際は原則、自治体担当者（必須）、障害当事者、専門職等の3者で参加していただくように促した。

1日目のオンライン研修は可能な限り当日受講してもらうこととしたが、当日参加できない場合は録画を動画配信し、2日目、3日目に参加する前に視聴するように促した。

2日目、3日目は都内にて集合で研修を実施した。なお、都道府県及び指定都市単位でグループを組成した（なお、複数の都道府県が同じグループになるようにグループ分けをした）。また、各グループに少なくとも1人のファシリテーターを配置した。ファシリテーターは前出の検討委員または研修協力者が担当した。また、介助者が必要な場合は介助者にも参加してもらった。

② 受講者状況

受講者の状況は以下のとおりである。都道府県の出席率は80.8%、指定都市の出席率は45.0%であった。また、3日間参加した受講者は111人であった。そのうち障害当事者は27人であった。都道府県によっては障害当事者が参加していない場合もあり、今後参加を促していくことがポイントになると考えられる。

図表 12 受講自治体数

計	都道府県	指定都市
47	38	9

図表 13 受講者数

1日目 (10/27)		2日目 (11/8)			3日目 (11/9)		
オンライン開催		対面開催 (東京都千代田区)					
受講者	内 障害当事者	受講者	内 障害当事者	介助者	受講者	内 障害当事者	介助者
113	28	111	27	(8)	111	27	(8)

③ 研修の実施状況

1日目はオンラインであったが、2日目、3日目の研修の参加状況は以下のとおりである。グループワークのテーブルごとに着席していただき、研修を実施した。



(3) 受講後アンケート

2日目、3日目に参加した受講者全員からアンケートの回答を得ることができた。本節ではその結果について掲載する。

ア. 回答者の状況

受講者の属性は以下のとおりである。都道府県等には障害当事者と自治体職員、専門職等に参加していただくよう促しており、各都道府県等がおおよそそれぞれ各1人が参加した。ただし、一部自治体職員のみの場合があったようである。また、障害当事者の障害の種類を見ると精神障害者と身体障害者が対象者のほとんどであった。

図表 14 回答者属性 (参加者属性)

	件数	%
自治体職員	48	43.2
障害当事者	30	27.0
専門職	33	29.7
計	111	100.0

図表 15 障害の種類 (複数回答)

	件数	%
身体障害	10	33.3
知的障害	0	0.0
精神障害	18	60.0
難病	2	6.7
発達障害	1	3.3
高次脳機能障害	0	0.0
その他	1	3.3
回答対象数	30	

イ. 1日目の実施結果

1日目に実施したオンライン研修の役立ち度について確認するとほぼすべての人が「大変役に立つ」「ある程度役に立つ」との回答であった。

なお、初日オンラインに関する自由記述の回答をみると、ほとんどが参考になったとの回答であった。ただ、オンライン研修そのものには肯定的な意見と改善を求める意見との両方があり、開催の状況や時間配分、休憩の入れ方など、実施方法に工夫が必要であると考えられる。

図表 16 1日目 役立ち度

	件数				列%			
	自治体職員	障害当事者	専門職	計	自治体職員	障害当事者	専門職	計
大変役に立つ	19	20	23	62	39.6	66.7	69.7	55.9
ある程度役立つ	24	9	9	42	50.0	30.0	27.3	37.8
どちらともいえない	2	0	1	3	4.2	0.0	3.0	2.7
あまり役立たない	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
全く役立たない	0	1	0	1	0.0	3.3	0.0	0.9
不明	3	0	0	3	6.3	0.0	0.0	2.7
計	48	30	33	111	100.0	100.0	100.0	100.0

図表 17 1日目 主な自由記述の内容

感想	<ul style="list-style-type: none"> ・初日に基礎、専門、フォローアップ研修の全体像をつかむことができ、また、実際の当事者の方たちのありようを講義という形で知ることができたので、今後、私自身が講師になる時のための非常に良い勉強になった ・カリキュラムの概要だけではなく、実施時のポイントや研修を行うにあたっての考え方についても知ることができたため理解が深まった ・研修の運営についてイメージが通知だけでは全く湧かなかったが、スケジュールについて理解できた ・戸惑う部分もあったが、2日目とセットの内容であれば、導入としてちょうどよかった ・当事者の方々の講義が多くとてもわかりやすかった、当事者の参画の大切さを理解することができた ・一コマ15分程度なのも飽きずに聞いてよかった ・情報量のボリュームが多く整理が大変だったが、資料がわかりやすくコマ毎にどの属性の者が担当するか等わかりやすく記されていた点が企画、運営の参考となった ・短時間の講義1つ1つの内容が濃く、考えさせられることが多かった。複数の講師の方から出たワードやピアの概念は、特に大事なことなのだと感じた
改善点に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・資料がもう少し早く見られると助かります ・オンラインなので分かりにくいところも多くありました。資料で確認をしました ・単元が細切れだったので、もう少しまとめても良いように思えました ・フォローアップのやり方がほかの研修に比べて分からなかったのももう少し説明がほしかった ・経験がない方については時間が短い気がします ・オンラインはつらかった。研修の良さが伝わりにくかった

ウ. 2日目、3日目の実施結果

2日目、3日目の研修の役立ち度は、ほぼ全員が「大変役立つ」「ある程度役立つ」であった。いずれの属性においても「大変役立つ」の割合が多かった。1日目のオンラインの時と比べても、「大変役に立つ」との回答割合が大きかった。対面でグループワークを行ったことも影響していると考えられる。

自由記述に関しても参考になったとの肯定的な意見がほとんどであった。

図表 18 2日目、3日目 役立ち度

	件数				%			
	自治体職員	障害当事者	専門職	計	自治体職員	障害当事者	専門職	計
大変役に立つ	38	25	29	92	79.2	83.3	87.9	82.9
ある程度役立つ	8	5	3	16	16.7	16.7	9.1	14.4
どちらともいえない	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
あまり役立たない	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
全く役立たない	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0
不明	2	0	1	3	4.2	0.0	3.0	2.7
計	48	30	33	111	100.0	100.0	100.0	100.0

図表 19 2日目、3日目 主な自由記述の内容

肯定的な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・演習を通して多くの事を学べた。当事者、支援者の方々の考えや想いを聞けたり、他県の状況が把握できたりした ・対面研修が相手の顔の表情が確認できて非常によかった ・他の自治体との交流を通し、様々な意見を聞くことができよかったです。他の自治体の状況を把握できたので、県に戻った際には活かしていきたいです ・実際に研修のカリキュラムを体験することで、研修の雰囲気を具体的に知ることができた ・他都道府県の状況や取組について情報共有できたことで、今後自県で研修を行うためにするべきことが見えてきた ・実施している都道府県の実践事例や各障害当事者の生の声が聞けて大変参考になった ・東京都、宮崎県と先駆的に取り組まれている自治体のならではの悩みや声を聞くことができ、非常に貴重な機会となった ・当事者たちの取組例はなかなか触れる機会もないため、極めて有意義で、内容の理解に具体的なイメージをもつことができた ・今後の研修企画体制作りについて県内外で話し合う事ができ、自分の役割を考え、実行に向ける事ができそうです ・合理的配慮について、今度より検討を深めていく重要性に気付かされました ・これまでの研修のふり返りと今後取り組まなければいけないことが明確化された。他自治体の感想を聞いて、新たな知見が得られた ・さまざまな障害をもった人が関わることの重要性が理解できた ・研修の企画者が受講者を体験すること（講義を聴く際の席の配置、照明、講師の話し方、休み時間の回数、長さ、グループワークの配分等）は大変有意義でした ・ピアに向けた内容になっていて大変具体的でわかりやすかった。専門用語が少なく助かる
改善点に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・演習がもう少し多い方がよいと思います

エ. 各研修プログラムの実施結果

特に参考となった研修について複数回答で回答してもらった。特に参考になった研修で割合が高かったものとしては、「ピアサポートの実際・事例（基礎研修）」の割合が最も大きく、次いで、「演習③」「研修開催準備と運営 障害ごとの合理的配慮について」の講義の回答割合が大きかった。

図表 20 特に参考になった研修（複数回答）

	件数				%			
	自治体職員	障害当事者	専門職	計	自治体職員	障害当事者	専門職	計
回答者数	48	30	33	111				
【基礎研修】								
ピアサポートの理解	20	12	20	52	41.7	40.0	60.6	46.8
ピアサポートの実際・事例	26	11	21	58	54.2	36.7	63.6	52.3
コミュニケーションの基本	13	17	19	49	27.1	56.7	57.6	44.1
障害福祉サービスの基礎と実際	13	10	16	39	27.1	33.3	48.5	35.1
ピアサポートの理解の専門性	18	18	19	55	37.5	60.0	57.6	49.5
【専門研修】								
基礎研修の振り返り	11	9	13	33	22.9	30.0	39.4	29.7
ピアサポーターの基礎と専門性	14	15	18	47	29.2	50.0	54.5	42.3
ピアサポートの専門性の活用	20	16	20	56	41.7	53.3	60.6	50.5
関連する保健医療福祉施策の仕組みと業務の実際（障害者）	10	13	15	38	20.8	43.3	45.5	34.2
ピアサポートを活用する技術と仕組み（事業所）	17	10	13	40	35.4	33.3	39.4	36.0
ピアサポーターとしての働き方（障害者）	20	19	17	56	41.7	63.3	51.5	50.5
ピアサポーターとしての働き方（事業所）	20	11	17	48	41.7	36.7	51.5	43.2
セルフマネジメントとバウンダリー	23	17	20	60	47.9	56.7	60.6	54.1
チームアプローチ	13	12	16	41	27.1	40.0	48.5	36.9
【フォローアップ研修】								
位置づけ・カリキュラム概要	12	11	16	39	25.0	36.7	48.5	35.1
【2日目研修】								
行政説明	15	10	17	42	31.3	33.3	51.5	37.8
ピアサポーターと専門職との協働の効果について	24	17	20	61	50.0	56.7	60.6	55.0
ピアサポートの理解(基礎研修)	19	17	19	55	39.6	56.7	57.6	49.5
ピアサポートの実際・事例(基礎研修)	36	23	30	89	75.0	76.7	90.9	80.2
演習①	23	18	23	64	47.9	60.0	69.7	57.7
障害者ピアサポート研修について(実施要綱)	22	13	16	51	45.8	43.3	48.5	45.9
自治体の実施事例報告	33	20	24	77	68.8	66.7	72.7	69.4
【3日目研修】								
ピアサポートに関する研修ならではのファシリテートのポイント	26	21	22	69	54.2	70.0	66.7	62.2
演習②	28	22	23	73	58.3	73.3	69.7	65.8
研修開催準備と運営 障害ごとの合理的配慮について	33	22	23	78	68.8	73.3	69.7	70.3
演習③	33	22	24	79	68.8	73.3	72.7	71.2
研修まとめ	15	12	14	41	31.3	40.0	42.4	36.9

オ. 本研修に関する今後の希望

本研修において今後希望する内容について確認すると次のような回答が得られた、グループワークの重要性、合理的配慮の視点など今後の改善の参考にしていきたい。

図表 21 今後の希望 主な自由記述の内容

肯定的な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な研修ですので、数年は続けてほしいです ・次回は他の地域とのグループ演習をしてみたいです ・実施自治体の報告が聞きたいです ・今回の研修での熱や思いが今後も続いていくといいと思います ・当事者のお話や、都道府県の取り組み事例等は、引き続き実施していただきたい ・来年度も開催してほしい(県での研修実施の目処が立つまでは参加したい) ・来年度以降の定期的な開催 ・次年度以降も引き続き、行政・ピア・専門職を対象とした本研修を開催してください(実際にやってみた課題の共有、研修後のフォローをどうしているか等、他自治体と意見交換したいです) ・研修に使用したパワポの資料等(自治体具体例を除く)を伝達会議等で使用したい(下線や囲み線などで強調したい)ので、内部用として御提供をお願いしたい※HPなどの対外公表はしません ・今回の現地研修の自治体のメンバー表、講師陣(団体)の連絡表の提供をお願いしたい
今後の改善点に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> ・質問コーナーがほしい ・合理的配慮について他の障害当事者からも聞きたい ・3 障害同時に研修をやるのであれば、どうやっていくのか具体的事例をもっとあげて欲しい ・次年度予算要求時期より前(～9月頃)に実施いただけると、更に活かせると思いました ・指導者養成研修のフォローアップ研修を希望します ・フォローアップ研修について、もう少し詳しくお教え頂けたらありがたいです ・各自自治体による研修受講者からの声などを聞いてみたい ・参加者名簿がほしかった ・グループを途中でシャッフルしてもよいのではないか ・車いす対応トイレの数等環境面の配慮 ・できる限り対面での開催をお願いしたい。3日間共に対面研修が望ましい

カ. 本研修に関する今後の希望

障害者ピアサポート研修を今後実施していくにあたっての困りごとについて、自由記述での回答は以下のとおりである。予算確保の他、都道府県と指定都市手との役割分担の問題、合理的配慮に関する事項、障害当事者を含めた講師やファシリテーターの人材確保などに関する不安点などが意見として出された。

図表 22 実施にあたっての困りごと

- ・予算の確保
- ・指定都市が実施しない場合の県の役割
- ・合理的配慮に適する会場の確保
- ・知的障害当事者の講師の確保、(講師・ファシリテーター) 人材の確保
- ・「にも包括」の精神ピアとの棲み分け、精神ピアが独自でたくさん養成できている分、精神だけで話を進めてしまいそうになるのが悩み
- ・自身の自治体のマンパワー同士を適切につなぐ、発見することができるか不安
- ・財源、課内の人員、ピアサポーター当事者
- ・ワーキングチームにまだ入っていない障害領域もあるので、参加者、団体を増やして、ピアサポートを広めていく事ができればと思っています
- ・ワーキングチームが固定化され負担が偏らないような体制作り
- ・当事者の方とつながるためのノウハウを教えてください。また、当事者と専門職の方(現在の検討委員以外)を引き込んでいくにはどうしたらいいのでしょうか
- ・ピアの良さを伝えていくために、こういうことをやるといいよ、ということを教えてください
- ・オンラインによる演習の質向上。講師・ファシリテーターの確保
- ・他事業で行っているピアサポートとの連動制について検討する必要性
- ・カリキュラムにそってテキストをどう作っていけばいいのか(専門業者には委託しないため)
- ・ある程度の合理的配慮に関する予算要求を行ったが、今回の研修を通じてより重要性がわかった。予算が限られるなか、どこまで合理的配慮を行う必要があるかが課題
- ・地域生活支援事業が補助割れしており、財政部局への予算要求に苦慮しています
- ・当事者の研修企画への参画
- ・行政担当として、効果などを数値目標で示さないといけないことが多いので自治体間の情報共有の場を多く作って欲しい

キ. 今後の予定

自治体職員の回答を見ると、16.7%がすでに実施、25.0%が今年度実施予定、25.0%が次年度実施予定であり、全体で66.7%が実施済・予定との結果であった。一方、14.6%が検討中、14.6%が実施自体検討できないと回答しており、今後自由記述欄の分析踏まえ、実施できるための方策を考察したい。

図表 23 今後の障害者ピアサポート研修の実施予定

	件数				%			
	自治体職員	障害当事者	専門職	計	自治体職員	障害当事者	専門職	計
今年度すでに実施した	8	7	9	24	16.7	23.3	27.3	21.6
今年度実施予定である	12	13	10	35	25.0	43.3	30.3	31.5
次年度実施予定である	12	8	7	27	25.0	26.7	21.2	24.3
次年度実施するかどうか検討中である	7	2	4	13	14.6	6.7	12.1	11.7
研修の実施自体検討できない	7	0	1	8	14.6	0.0	3.0	7.2
不明	2	0	2	4	4.2	0.0	6.1	3.6
計	48	30	33	111	100.0	100.0	100.0	100.0

3. 次年度に向けて

検討委員会等での意見交換を踏まえ、今後本研修をより全国的に実践していくための方策等について、本章で記載する。

(1) 本研修の今後の改善ポイント

研修内容自体はおおよそ高い満足を得ていることから、次年度以降も本研修の内容をベースに展開していくことで、より障害者ピアサポートの普及に繋がっていくと考えられる。受講後のアンケートからも明らかなように、主に実施に向けた運営面での課題がいくつか出されたので、本節ではその内容を中心に記載する。

ア. 合理的配慮の視点

本研修では、バリアフリーの会場を確保したものの、車いす対応トイレが1か所しかないなど、改善の余地があった。この他にも、視覚障害者や聴覚障害者への情報保障への対応、知的障害者などへの配慮した資料の作成など、今後対応すべき課題がいくつか指摘されている。

どのような障害があっても受講できるようにするための検討は継続的にしていく必要があると考えられる。

イ. 障害当事者の参加

ほぼすべての都道府県等で障害当事者に参加していただいたが、一部の都道府県等では自治体担当者みの参加にとどまった。ピアサポートの性質上、障害当事者の参画が不可欠と考えられることから、都道府県等担当者が地域に目を向け、より適切なチーム編成で参画できるように啓発していくことが重要であると考えられる。

ウ. 時間配分

本研修は3日研修で、2日目、3日目は連日での開催となった。また、オンライン研修も丸一日の研修となっている。そのため、障害特性等によっては、長時間継続しての参加が難しいのではないかといった意見も聴かれた。時間配分や休憩の取り方などについては、今後改善の余地があると考えられる。

エ. オンラインでの実施

本研修は1日目をオンラインで実施した。遠方での参加者等からは参加しやすいなどの声をいただく一方、2日目、3日目の研修結果を見ると、対面での重要性も再認識させられた。感染症の影響もあるが、参加のしやすさや研修（特に演習）の効果などを見据えて、オンラインでの実施については今後もその方法を検討していく必要があると考えられる。

オ. フォローアップ研修に関する解説の充実

加算要件となる基礎・専門研修については、科目ごとに解説し研修スライドも参考資料と

して掲載した。一方で、フォローアップ研修については全体を一纏めにした解説に留まり、研修スライドも参考資料として掲載できなかった。障害者ピアサポート研修の実施要綱では、基礎・専門・フォローアップ研修を一体的な研修と位置付けていることから、フォローアップ研修に関する解説や研修スライドの参考資料としての掲載を今後、検討していく必要がある。

(2) 検討委員からの所見

本節では、本研修の検討段階から参画していただいた検討委員の意見を掲載し、最後のまとめにかえたい。

秋山浩子座長

様々な障害者が関わることによってお互いの違いを知るだけでなく、共通していることが多くあることに、この研修を通じて改めて気づくことができると思います。

私が厚労科研の障害者ピアサポート研修に関わり始めた当初は、違和感を感じていたところがありました。それは、研修のカリキュラムが精神障害ベースで作られていたこともあり、普段なじみのない用語が多用されていたことも理由の一つでした。違いばかりが目につきました。しかし、時間をかけて話し合う過程を通して、徐々に互いの理解につながってきたと実感しています。それは、障害の違いだけでなく、ピアサポーター（障害者・当事者）と専門家との間でも同じように思います。自立生活センターでは専門家は当事者（障害者）の敵として対立関係でとらえてきた歴史があります。医療や福祉の専門家から勝手に生き方を決められてしまい、そこから脱却するために闘ってきました。そうした経緯から専門家との協働に抵抗を感じていた部分もあると思います。また、自立生活センターではすでにピアカウンセラーを育てる研修（ピアカウンセリングなど）が行われていて、海外の障害者へも広めるなど、しっかり根付いていました。ですから最初は自分たち自立生活センターがやってきたことと、ピアサポート研修でやろうとしていることは違うのではないかと思ったりもしました。私の役目は自立生活センターがやっていることを他の障害の方々にも知ってもらうことなのではないかと思いました。当初は一方的に知ってもらいたいという思いが強かったように思います。

障害の違い、立場（障害当事者と専門家）の違いを理解して同じ目的を目指すには、何より一緒に過ごすこと、立場を尊重しながら話し合うことが大切だと気付かされました。

指導者養成研修は行政、専門家、当事者（障害者）の三者が、グループワークを通してピアサポート研修の中でも伝えている『協働』について、実戦で体感し学べる場にもなっています。また、指導者養成研修の講師構成も多様で、様々な障害や立場の人が関わっています。そのチームワークの良さを各自治体の方々にも知ってもらうことでも、研修で伝えたいこと、知って欲しいことを体現できているのではないのでしょうか。

岩崎香座長

2016年にピアサポートに関する厚労科研が始まり、今日にいたるまで、さまざまなことがありました。その研究班で多様な障害領域の当事者の方、現場の方、研究者の方に出会ったことは、私の宝物です。会議で熱い（熱すぎる）議論を経て、研修を実際にやってみて、資料やテキストをブラッシュアップしていくというプロセスを研究期間中、繰り返し、繰り返し行ってき

ました。多くの方のご協力のもとで練りあがってきた障害者ピアサポート研修が国レベルで採り上げられる日がくるとは、その時はまだ全く考えていませんでした。ピアサポートに関しては、過去にもさまざまな研究事業がありましたが、報酬化にたどり着くにはまだまだ時間がかかるだろうと思っていました。しかし、当時の専門官だった吉野氏の粘り強い交渉、当事者主体という時代の流れの中で、自治体の方を対象とした養成研修が実現しました。

国研修の当日の熱気は、私たちがこれまで実施してきた研修の雰囲気そのままでした。わざわざ足を運んでくださる皆様に何かお土産を持って帰ってもらいたいというのは、検討委員はじめ、国研修にかかわったすべての人の思いであり、各地でピアサポートを普及していただきたいとそう考えていたと思います。参加された自治体の何人かの方々からは、他の自治体との交流が持てたこと、グループワークが良かったというようなご意見をいただきました。コロナ禍で身近なところでも対面での会議や研修が少なくなっている中で、対面での国研修にこだわってきたことが間違っていなかったのだとうれしく思いました。

私は、今苦しんでいる仲間の助けになりたい、障害福祉サービスの中にピアサポーターの専門性を位置付けてもらいたいという多くの障害当事者の方の願いを原動力に、研修構築に関わってくださった方々とここまで走ってきました。しかし、報酬化が引き起こした波紋はプラスの方向にだけ向かっているわけではありません。そして、現実として、ピアサポーターが職場に定着するには、雇用する側と雇用される側の努力と信頼が必要だと思います。配置するだけでなく、ピアサポーターと事業所職員が支えあい、育ちあうという仕組みをどう作っていくのかという仕組みもぜひ、各自治体で今後ご検討いただけるとありがたく思います。

市川剛委員

指導者養成研修に関しては、都道府県担当者・医療・福祉専門職の3名セットという体制での参加形態が画期的だったのではないかと感じております。

(従来の研修は、現場でどこまで周知されているのかが不安な部分も多々あったと思うので)

また、(私のメモが正しければ) 38 都道府県／9 政令都市が一堂に会する研修も、私は初体験でしたので、極めて刺激的でした。

皆さんが悩みを共有し、真剣に議論できる場があったことは、非常に貴重だったと思います。

岩上洋一委員

「地域共生社会にむけた大きな一歩」

平成28(2016)年、岩崎香先生が主任研究をされていた厚生労働科学研究「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」でモデル研修が行われました。全国から障害当事者と専門職が集まってきました。私は今でもその光景を覚えています。

私のグループにも、身体、知的、精神、難病、発達、高次脳機能障害と、様々な障害領域の方が参加されていました。内心、どうなるかと思っていたのですが、「一人暮らし」、「恋愛」、「仕事」、「ピアサポート」、「家族」などで大いに盛り上がり、まさに、「わかちあい」でした。私にはとても刺激的なことで、そのとき、この取組みはきつとうまくいくだろうと確信しました。しかし、これこそが専門職である私の偏見であって、一部の障害当事者の皆さんには、そんなこと当たり前のことだったんじゃないでしょうか。そう考えると恥ずかしくもなります。私は、こう

した体験こそ、多くの障害当事者や専門職の皆さんにしてもらいたいと思いました。

その後、厚生労働省はじめ多くの皆さんのご尽力により「都道府県地域生活支援事業」にピアサポート研修が位置づけられ、障害報酬上も評価される時代を迎えました。私も、令和3（2021）年度から埼玉県のパイサポート研修事業にも携わっています。様々な障害領域の皆さんと専門職でワーキングチームをつくって研修を実施しています。ここでのやりとりも楽しいのですが、実際の研修受講者の満足度は本当に高いものがあります。「今までの受講した研修で最高！」という声も障害当事者、専門職の双方から聞かれています。

今回、この指導者研修を受講された皆さんも各地でこのような研修を実施していきたいと思われたことでしょうか。確かに実施にあたってはいくつかのハードルを乗り越える必要があるかもしれませんが、皆で協力して乗り越えていきましょう。

その先にあるピアサポーター皆さんの活躍は、私たちが目指している地域共生社会にむけた大きな一歩となることでしょうか。私はそのことを確信しています。

彼谷哲志委員

○ピアサポーターの業務や役割について

指導者養成研修の範疇を超えるかもしれませんが、ピアサポーターの業務や役割を整理する、再確認すること、自治体からの受講者とも議論することが大事だと考えます。

協働する支援者がピアサポーターの意義を理解しているものの、ピアサポーターが職場で補助的な役割に留まることは避けるべきですので本質的な議論を繰り返して、実践を広めていきたいところです。

○研修のファシリテートについて

今年度は初年度でありファシリテートについての時間を多く割くことができませんでした。

次年度以降、研修の概要、企画についての課題がクリアになっていけばファシリテートについて時間を増やせればと思います。

ファシリテートにおいてピアサポートの考え方を大事にしていることを通じて、ピアサポートを体現することを意図した研修であることが伝わればと思います。

ピアサポートは知識だけでなく、当事者が当事者を支援することを超えて、お互いの関係性をつくることだと感じていただけると嬉しいです。

○研修のオンライン対応

私自身は、（今の要綱での）障害者ピアサポート研修は対面がよいと考えています。

基になった厚労科研やピアサポート専門員の研修は時間数や演習の組み立て方もオンラインを想定していないものでした。

グループワークでの参加者同士の支えあいは、現在のオンライン会議ツールでは再現できないだろうと思いますし、仮にオンラインならばもう少し時間に余裕を設けるなどの工夫が必要ではなかろうかと感じます。

対面でのグループワークの醍醐味を知っていると、積極的にオンライン開催をおススメしませんし、費用や場所の点で容易だからという理由でオンラインに流されることは避けるべきです。

COVID-19以降でオンラインの集まりや研修に参加するようになりましたが、オンラインだか

からこそ参加できる人たちの存在にあらためて気づきました。

障害特性故に移動に困難がある人たちです。精神的に電車バスに乗りづらい人もいますし、車いす+さまざまな機器のために難しい人、長距離の移動は心身への負担から制限を受ける人もいます。そのような人がピアサポーターとして務まらないわけではないですし、自治体でリーダー的な立場を担う人もおられるでしょう。東京でもっばら開催される対面での指導者研修は、とくに地方に住んでいて、障害特性故に移動に不利のある人はハードルが高いものかもしれません。かくいう私自身も、長時間の鉄道移動が今は精神的にしんどいので、飛行機で行き来できることが条件になります（がんばったら鉄道でも何とかかなと思います、余計な負担をかけたくないものです）。移動が参加への障壁になる人たちのことを思うと、オンラインの選択肢（部分的であれ）も検討する必要もあるではないか、と考えることがあります。オンラインの研修において、障害特性を考慮しながら、ピアサポートの考え方を反映するにはどのようなことが可能だろうか、という議論はあってよいでしょう。面積が広大であればオンラインの必要性が高いかもしれませんし、今の技術では時期尚早であり、今後の技術革新に期待する選択は当然ありだと思えます。

また、障害者ピアサポート研修とは別に自治体が主催する交流会などを積極的に開催することで、対面とオンラインを補完しあう方法もあるかもしれません。

この障害者ピアサポート研修や指導者研修では、人と人が出会うこと、出会うことでの学びが起きること、学びあい、支えあいがあることが真髄だと思います。

国や自治体で研修の本質を議論していただければと願っています。

小阪和誠委員

「今後の指導者養成研修のあり方について」

改めて、言葉にすることは難しいので、以下文章は、報告書に記載できるものではないと思いますが、徒然なるままに書き記します。

そもそも、障害者ピアサポート研修の実施について、私は東京都の取組が全国の取組における標準化になってほしいと思っています。

その具体的な東京都の取組、参考となる部分としては、複数の当事者の方を含めた形で、カリキュラム検討委員を構成し、その枠組みにおいて、丁寧に「各講座の目的や伝達事項、資料形成を議論しあい、ともに確認しあう」ことに費やし、そのために必要となるカリキュラム検討委員会を妥協せず十分な回数、開催実施し、且つ、事務局がまた丁寧に議論や確認しあった内容等をカリキュラム検討委員間の共通理解の礎として、形にまとめていったことが大きいと思います。

改めて、お伝えすることでもありませんが、障害や病気からのリカバリーにおいて、ピアサポートがもたらす好影響は、非常に可能性の大きいものと思います。

ピアサポートでしか補えあえない部分がきっとあると思っています。

（一方で、ピアサポートが万能ではないことはいまでもないですが）

無駄だったとは思いませんが、私が病的に引きこもってしまった、5年間も、仮にピアサポート活動従事者と、もっと早くに出会うことでできていたのなら、その期間は短縮できたかもしれませんし、私を見守ってきた両親や兄弟の非常に大きな心労もきっと軽減されたことでしょう。

障害や病気による、言語にしつこしがたい負の気持ちや事柄、体験等が、誰かの役に立つとい

うことへの「昇華」を為す、ピアサポートは、障害や病気の体験を持つものにとって、大げさかもしれませんが、生きる意義を見出すことにつながることもあります。

自分も生きていていいんだと言いますか。

その「昇華」を体現したピアサポート活動従事者と、ピアサポート的支援を必要とする方達が、地域で当たり前に出会えるようにできる地域づくりは、わたしたちのリカバリー実現とその質の向上にも不可欠な要素だと思います。

上記を実現するために、そして地域で提供されるピアサポートをより実効性のあるものとしていくためにも適切で良質な指導者養成研修実施は、非常に大切な取り組みのひとつとなると思います。

四ノ宮美恵子委員

指導者養成研修では、多様な障がいのある方がそれぞれの障がい領域の活動について紹介されましたが、そこでは多様性とともに関わり領域の枠を超えたピアサポートに対する共通した思いがその場に居合わせた聞き手にも伝わってきて、一委員としても大変感銘を受けました。

これと前後して、自分自身に関わる高次脳機能障がい領域においても、ピアサポートに対する関心が確実に高まっており、研修会などに声がかかることも増えてきました。しかし、高次脳機能障がい領域のピアサポーターは、障がい福祉サービスを提供する事業所で雇用されている方は全国でも数名のみではないかと推察しており、多くは企業等で就労しながら空いた時間を活用して任意団体としてピアサポート活動を行っています。

そのため、高次脳機能障がい当事者が自治体研修の受講者となる例は非常に少ない状況です。現状では、加算対象の事業所のピアサポーターが優先されるという実態があることも高次脳機能障がいのある受講者が少ない要因であると考えます。しかし、受講者が少しずつでもでてこない、高次脳機能障がい領域のピアサポーターは育ってこないという悪循環になっていくことが考えられます。高次脳機能障がい当事者を含む多様な障がいのある方が参加して研修をつくりあげているにもかかわらず、受講者側には多様な障がいのある方の参加が実現されてないと、本来の研修目的は達成されないかと考えます。多様な障がいのある方が受講できる仕組みを、指導者養成研修で検討することも必要ではないかと考えています。

参考までに、2023年1月に開催された高次脳機能障がいピアサポート準備研修には50人余りの関東圏からの障がい当事者の参加がありました。その中には、自治体研修の受講を申し込んだものの受講ができなかったという声や、来年度は是非受講させてほしいという強い要望も寄せられています。

中田健士委員

次年度も実施できるのであれば、大枠は今年度の内容で良いと思います。

追加として今年度で全国的に実施している場所が多いと思うので、それぞれの障害領域の方への対応の具体的対応事例の共有があっても良いと感じました。また、発達障害の方のピアサポーターの当事者委員の方にもご参加頂ければより良い研修になると思います。

あと、参加者の日程などの都合があると思いますが、集合研修は3日間とした方が、より参加者同士のつながりも深まると思います。

奈良崎真弓委員

障害者ピアサポート委員会の感想

奈良崎 真弓

- ①この委員会に参加して来て思うことがたくさんあります。
- ①私はピアサポートという経験がないので難しかったです。
- ②いろんな障害の仲間と出会ったことが楽しかったです。
- ③何回か会議に参加するたびに自分仲間が気持を聞くことがチャンスになったこと嬉しかったです。理由は仲間がピアサポート意味を伝える事が難しいので私は説明できないからです。
- ④良く知的障害者や、持っている本人活動がピアサポートと周りの関係者たちが言っている人たちが、私は違うと思いました。理由は本人活動は支援者という役割の人によって本人の相談をよくのってくれます。
- ⑤知的障害者がピアサポートとして役割があればいいかなと私は思っています。

し。理由は仲間が困った時はアドバイスができるようにする。

- ②知的障害者がピアサポートで仕事としてできると思うが、...
- ①やはり時間がかかると思うが、いつかみんながピアサポートの資格を取れると仲間のためにも役に立つと思います。
- ②自分ができることは、自分にも自信を持てると思います。
- ③支援者の人が自分たちのためにやってくれたとしても支援者のために役に立つと思います。

②全部の感想

今までは親たちや福祉関係者たちが本人たちにして全部決めていたが、これから本人たちも入って声を聞いて話し合ってもらいたいです。



又村あおい委員

障害のある人が、同じ立場であることを最大限に活かして活躍することができるピアサポートの仕組みが制度化されたことは、非常にエポックメイキングなことだと思います。

他方で、制度化されたことによる今後の懸念もあります。たとえば、かつて視覚障害者の外出付添いは「赤十字誘導奉仕団」というボランティア組織が中心となり担ってきましたが、現在は「同行援護」に置き換わって多くの地域で誘導奉仕団は解散しています。制度化による安定性と引き換えに、市民参画性は大きく後退しました。

ピアサポート（ピア活動）については、大きく個別対応を中心とした領域と集団活動を中心とした領域があり、知的障害分野に関しては（集団活動をピアサポートと呼称するかどうかの議論はありますが）圧倒的に後者が優勢です。そして、集団活動は知的障害者本人だけでなく、多くのボランティアによって支えられています。

今後、制度としてのピアサポートが定着するにつれ、ボランティアによって支えられているピア活動がどのような展開をみせるのか、育成会の立場としては後退しないように働きかけ続けるよりほかありませんが、注視していきたいと思っています。

もう1点、制度化されたピアサポートに知的障害者が参画したいと希望した際のハードルも解消されたとはいえません。研修の開催に当たっては十分な合理的配慮が前提となっていくこ

と思いますが、それでも修了までのプログラムは高い壁となるでしょう。今後の実践を通じ、ピアサポートに求められる資質は何で、そのためにはどういった事項を修めれば良いのかを明確化した上で、障害特性に応じた研修体制の再構築も必要になると思います。

将来、知的障害者も当たり前前にピアサポートを職業として選択できるようになり、かつ集団活動を中心としたピア活動も活発に展開されるようになることを祈っています。

宮本有紀委員

ピアサポート研修事業およびその指導者養成研修事業をつくっていく過程に関わらせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

この障害者ピアサポート研修事業に関わる中で、さまざまな障害について知る機会を得ました。さまざまな背景のある方たちと話し合いを重ね、一緒に何かを作り上げる過程、そして、さまざまな障害領域の方々が参加される研修会の際は、新たな気づきや発見の連続で、とても楽しい時間でした。これまで想像もしていなかった世界を見ることができた、大げさでなく、そう思います。私自身は精神保健領域で働いてきた関係で、精神障害者ピアサポートについて学んでいたところだったのですが、ほかの障害領域の方々とお会いし、お話をする中で、障害に関して自分があまりに無知だったことに気づきました。

また、研修準備を進める中で、社会に参加しやすくなるための配慮や仕組みがいまだないことが多く、まさに社会が障害を作っていることにも気づくことができました。そして、このようにさまざまな障害をもつ方たちと話し合い、協働した自分は、誰もが暮らしやすい社会を作ることに、これまでの自分よりは貢献できそうだと感じています。

私の勝手な思いを述べてしまいます。それぞれの自治体でこのような、障害に関連する研修事業を運営するというのは大変だと思われる方もたくさんいらっしゃるだろうと思います。それでもぜひ、できるだけ多くの、さまざまな障害のある方々と一緒に、この研修事業を運営していただけたらと思っています。何か新しいことを自分が主導してやらなければいけない、なんとかうまく進めなければいけない、とってしまったたり、障害のある人に迷惑やご負担をかけてはいけないのではないかと考えてしまったり、これまでのなじみの関係者（＝障害のある人を含めず）に進めるのが一番安全なのではないかと考えられる方もいらっしゃると思います。

しかし、この研修ではぜひ、スムーズに進めることを目標にするのではなく、さまざまな障害のある方と「一緒に」作り上げることを目標にして、取り組んでみていただけたらと思います。企画段階から多様な背景の人が含まれるチームを作ること。チームの人たちがお互いに分かり合うこと。それができれば、障害の有無や障害の違いを超えて尊重し合う関係ができ、その空気が研修にも社会にも波及して、ピアサポートの行われやすい場、過ごしやすい社会を作っていくことができるのではと思います。

森幸子委員

「指導者養成研修について」

- ・まず障害者ピアサポートの担当行政、支援専門職、当事者がセットで研修に出席することは、都道府県で研修を創り上げていくためにも必要なことと思います。

- 様々な障害当事者が姿を見せ、自ら語ることはインパクトも強く、伝わりやすく研修には有効だと思います。
- 様々な障害は、当然違いもあり、その違いを認め合える機会にもなります。
また障害が違って、共感できることや様々な障害が自分と重なっていると思うことも多くあり、その場で、仲間意識が生まれます。
- 当事者が多くの人前で語るということは、自信ありませんし、勇気も必要なので大変ですが、それでも研修として成り立つのは、研修に出席する人たちが、知りたいという思いを持ち、また障害当事者も知ってほしい、伝えたいという思いがあってその相乗効果で、どのような話になっても失敗にならず、心に響くものがあるからだと思います。
- 障害者ピアサポーターが関わる事案は、簡単に解決できることが少なく難しいものばかりです。困難なことを重く抱え込んでしまっていると、相談しても言葉にならず、なかなか表面に出てきません。そんな困りごとの本質を自分や仲間たちの経験から、見いだすことができるのもピアサポーターであると思います。また無理をして大丈夫だと言ったり、ウソをついたりしても見破られやすいのがピアサポーターです。解決には様々な専門職に繋ぐことも必要で、いかに多くの人達と繋がり合っているかが重要になります。そのような意味からも、これまで関わりのなかった、障害の方々と、種別を超えて、立場を越えて、協働できること、創り出すことは、この先の生き方に影響を与えるほどのものになるかもしれません。
- 研修の中で、演習を重視するのもとても有効だと思います。はじめて出会う人たちと一緒に、意見を交わし、検討することは、実践にとっても役立ちます。そのような意味からも、事例を持ち寄れるようなフォローアップ研修も是非取組んでいただきたいです。お互いがお互いのことを認め、思いを寄せる、共生社会の実現も可能であると思わせていただけた研修でした。それまでには、創り上げるという苦労が多々ありますが、そんな感動を各都道府県で実施される皆様にも味わっていただきたいと願っています。

以上

付録

別冊1 1日目研修資料

別冊2 2日目、3日目研修資料

付録 指導者養成研修アンケート

令和4年度 障害者ピアサポート研修事業に係る指導者養成研修事業

指導者養成研修事業 実施後アンケート

I. 参加者情報についてお伺いいたします。

自治体名		所属部署	
氏名			

①応募時の参加者属性についてご回答ください

回答欄

1. 自治体職員	2. 障害当事者	3. 専門職等
----------	----------	---------

⇒

--

②「2. 障害当事者」とご回答いただいた方にお伺いします。

障害の種類を以下よりお選びください。（あてはまるものすべてをお選びください）

	1. 身体障害		2. 知的障害		3. 精神障害
	4. 難病		5. 発達障害		6. 高次脳機能障害
	6. その他	⇒具体的にご記入ください			

II. 研修の内容についてお伺いいたします。

研修の内容についてお伺いいたします。

問1. 「初日オンライン研修」について、今後の障害者ピアサポート研修を実施するにあたり、どの程度役立つものとなりそうか、いずれかひとつを選択してください。

1. 大変役立つ
2. ある程度役立つ
3. どちらともいえない
4. あまり役立たない
5. 全く役立たない

⇒ 回答欄

--

問2. 「初日オンライン研修」について、上記回答の理由をご記入ください。

--

問5. 本指導者養成研修の以下のプログラムで特に参考になったプログラムをお選びください
(すべてに○をつける)

1日目研修(オンライン研修)

【基礎研修】

- | | | | |
|--------------------------|---------------|--------------------------|----------------|
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートの理解 | <input type="checkbox"/> | ピアサポートの実際・実例 |
| <input type="checkbox"/> | コミュニケーションの基本 | <input type="checkbox"/> | 障害福祉サービスの基礎と実際 |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートの理解の専門性 | | |

【専門研修】

- | | | | |
|--------------------------|-----------------------------|--------------------------|----------------|
| <input type="checkbox"/> | 基礎研修の振り返り | <input type="checkbox"/> | ピアサポーターの基礎と専門性 |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートの専門性の活用 | | |
| <input type="checkbox"/> | 関連する保健医療福祉施策の仕組みと業務の実際(障害者) | | |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートを活用する技術と仕組み(事業所) | | |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポーターとしての働き方(障害者) | | |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポーターとしての働き方(事業所) | | |
| <input type="checkbox"/> | セルフマネジメントとバウンダリー | <input type="checkbox"/> | チームアプローチ |

【フォローアップ研修】

- 位置づけ・カリキュラム概要

2日目研修

- | | | | |
|--------------------------|------------------------|--------------------------|-----------------------|
| <input type="checkbox"/> | 行政説明 | | |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポーターと専門職との協働の効果について | | |
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートの理解(基礎研修) | <input type="checkbox"/> | ピアサポートの実際・実例(基礎研修) |
| <input type="checkbox"/> | 演習① | <input type="checkbox"/> | 障害者ピアサポート研修について(実施要綱) |
| <input type="checkbox"/> | 自治体の実施事例報告 | | |

3日目研修

- | | | | |
|--------------------------|-------------------------------|--------------------------|--------------------------|
| <input type="checkbox"/> | ピアサポートに関する研修ならではのファシリテートのポイント | | |
| <input type="checkbox"/> | 演習② | <input type="checkbox"/> | 研修開催準備と運営 障害ごとの合理的配慮について |
| <input type="checkbox"/> | 演習③ | <input type="checkbox"/> | 研修まとめ |

問7. 今後、貴自治体が実施する障害者ピアサポート研修の実施予定について、いずれかひとつを選択してください。

- 1. 今年度すでに実施した
- 2. 今年度実施予定である
- 3. 次年度実施予定である
- 4. 次年度に実施するかどうかを検討中である
- 5. 研修の実施自体検討できていない

⇒ 回答欄

問8. 本研修（指導者養成研修）において、今後希望する内容をご記入ください。

問9. 貴自治体で障害者ピアサポート研修を実施する際の困りごとや課題があれば自由にご記入ください。

令和4年度障害者ピアサポート研修事業に係る
指導者養成研修事業 事業報告書

発行日：令和5年3月

編集・発行：PwC コンサルティング合同会社